古代南アラビアの紀元について

蒔 勇 造^{*}

ABSTRACT Yûzô SHITOMI, *Problèmes des différentes ères sud-arabes antiques*: Pour autant que nous le sachions, il y avait deux systèmes de datation en Arabie du Sud antique. Le plus ancien est un système de datation par des magistrats éponymes et était en usage dans les royaumes en bordure du désert de Şayhad et à Sm'y jusqu'à la fin du III^e siècle apr. J.-C. Dans un second système en usage à partir, au plus tard, du I^{er} siècle de notre ère jusqu'au VI^e, on compte les années partant d'une époque (=ère). Nous avons étudié, dans cet article, des problèmes importants du deuxième système de datation. Les conclusions que nous tirons sont ce qui suit:

1. A propos de l'identification des ères, nous pouvons distinguer trois ères concurrentes: l'ère de *Mbħd* (=l'ère ħimyarite) en usage dans la confédération tribale de Ĥimyar, l'ère de *'b'ly* en usage dans la tribu de Radmân, et l'ère de *Nbṭ* en usage dans la tribu de Maḏḥay.

2. Etant donné que chacune des ères avait sa propre formule caractéristique de datation, on pourrait dire que les différentes formules correspondent respectivement à des ères différentes. Mais il y a des cas où la diversité de certaines formules ne peut s'expliquer que par le décalage chronologique qui sépare des dates exprimées par rapport à une même ère donnée. Et il y a aussi des cas où l'on doit tenir compte du facteur régional pour comprendre la particularité de formule de quelques inscriptions.

3. Dans nos trois articles précédents, nous avons étudié le début de l'ère ħimyarite en arrivant à la conclusion qu'il tombe en 110 av. J.-C. Partant de cette date, nous pouvons dire que les débuts de l'ère de *'b'ly* et de l'ère de *Nbṭ* se placeraient respectivement en 74/75 apr. J.-C. environ, et vers 31 av. J.-C. avec une marge d'erreur inférieure à 15 ans.

* 東京工業大学工学部助教授

4. Quant à l'origine des ères, il pourrait se dire que la fondation de chaque ère doit commémorer un événement réel et historique. Pour les Ḥimyarites, ce serait la naissance de la confédération des tribus qui aurait désormais été appelée “Ḥimyar”, et pour les Radmânites, leur séparation d'avec Qatabân et affiliation à Saba'-Ḥimyar. Nous supposons que l'origine de l'ère de *Nbṭ* soit aussi un événement politique concernant la tribu de Maḍḥay.

I はじめに

前イスラム期の南アラビアには、イスラム化に先立つ千数百年前より、高度に発達した文化をもつ国々が存在した。その発展と変遷の経緯を理解するためには、何を措いてもまず、それらの諸国で継起した諸事件の前後関係と、さらに出来れば、その絶対年代を解明しなければならない。それには、同時代史料であるところの碑銘文の製作年代を判定し、それを基にそこに記されている事件そのものの年代を推定するというのが、最も基本的な方法である。そしてそのための手段として、碑銘文の書体の変遷を手懸りに、史料の相対年代を推定することや、諸王朝の系譜の復原を通じて、関連史料群を年代的に整理することが、一般によく行なわれてきたが、それと並んで、これらの諸国で通用していた暦法や紀年法を解明する⁽¹⁾ことが、やはり重要な意味を持っている。というのも、史料の碑銘文に散見する暦年が、それがどのようなシステムの紀年法に拠っているのか判明すれば、史料やその史料に記されている事件の編年を行なう上で、極めて有効な手懸りとなるからである。

ところで、従来の研究で明らかにされたところによると、古代の南アラビア諸国においては、暦年を示すために次の2種の方法が用いられた。一つは循環的な時間観に基づく方法で、一定の任期のおそらくは高位の神官が名祖となり、その在位年数で暦年を表わした。この紀年法は古くから各国で使用され、サバ王国では3世紀末の滅亡に至るまで、重要事件の年代を記すにはこの方法に依った。殊に最後の二百数十年間は史料も比較的多いので、この間の名祖システムはかなりの程度まで明らかになっている。しかし、西暦との対応関係や、システムの原則と実際の運用との間のズレの解明など、今後の研究を俟たねばならぬ問題はまだまだ多い。もう一方は、直線的な時間観に基づく方法で、ある特定の時点（＝紀元）からの経過年数で暦年を表わした。この方法が実際に使

用され始めた時期は、今のところまだよく判っていないが、後で述べるように、遅くとも1世紀には一部で既に通用していたのではないと思われる。そしてそれから、最後の記録が残っている6世紀の半ば過ぎまで、数百年間にわたって使用された。本稿ではこのうち、史料的に恵まれており、また西暦との対応関係もかなり正確に明らかにできる後者をとりあげて、この紀年法に関する諸問題を検討する。

本論に入る前に、史料をまとめた(表1)について、若干説明しておきたい。これは、未刊行のものも含めて現在までに知られている、紀元を基に暦年の記されたすべての碑銘文を、西暦に換算した年代順に並べたものである。紀年がほぼ解読できたものが52点、他にテキストの欠損のため紀年が一部しか解読できないものが5点ある。第2欄の数値がテキストに実際に記されている紀年で、それを西暦年代に換算した数値が第1欄に挙げてある。但しこの換算は、あくまでも私見(詳細は後述)に従って行なわれたもので、これが学界の通説という訳ではない。第3欄の碑銘文の整理番号の中に、その史料の由来地(もしくは発見地)が既に含まれている場合には、第4欄の記載は省略してある。テキストに王名が記されている場合にはその王名を、それが無い場合には作者名を、第5欄に挙げた。第6欄には、テキストの中の紀年を記した部分を翻字して引用した。この紀年は、碑銘文の製作年代である場合と、そこに記されている事件のおこった年代である場合との、二つのケースがあるが、この違いは本稿の内容にかかわってこないので、第6欄ではこの区別を無視してある。

II 紀元の種類

先ず、前イスラム期の南アラビアにおいて、そもそも何種類の紀元が存在したのかという点が、論議的になっている。かつては、南アラビアに紀元は1種のみという説さえあったが、近年北イエメンのアル・ミーサール al-Mi'sāl 遺跡⁽²⁾で発見された刻文群の中に、同一の年が2種の紀元に基づいて異なった暦年を与えられている例が一つみつき⁽³⁾、これによって複数の紀元が並存したという点については、最早異論の余地はなくなった。

さてそれでは何種類の紀元が、という点になると、研究者の意見は容易に一致しない。全57点のテキストについて第6欄の紀年形式を見ると、一部には確かに紀元の名称が明記されているが、大部分にはこれが表示されていない。その理由として、おそらく、他の紀元と混同されるのを避けようという意志が働

いた場合には、その紀元の名称を明記したが、それ以外の場合には、殊更その点を断わらないのが当時の慣行であったのだろう、と考えられている。明記された紀元名には、⁽⁴⁾*'b'ly*, ⁽⁵⁾*Mbhq*, ⁽⁶⁾*Nbt* の3種がある。この他に、(表1)の1番上の Naḡi 1 に記された「*Bkrm* の年」を、ロバン Chr. Robin 氏等は第4の紀元⁽⁷⁾と見做している。しかし筆者は後述の理由によりこの説には反対で、これまで確認された紀元は上記3種のみという見解である。従って、紀元名が表示されていない他の紀年も、この3種のいずれかに基づいているということになる。その中の多くのものは、由来地・王名・暦年を示す数値等から見て、どの紀元に拠っているのか殆ど異論なく認められているが、いくつかのものについては、その帰属に関して意見が分かれている。(表1)の中では、碑銘番号の左肩に付けたアステリスクの数によって、その史料に記された紀年が拠っている紀元の種類を示してある。今述べたように、中にいくつか分類に問題のあるものもあるが、それらについては後で検討する。

最後に、各紀元が通用していた地域について。「*Mbhq* 紀元」は最初ヒムヤル部族連合の内部で使用されていたが、後にこの部族連合の勢力が拡張するとともにその通用範囲も拡がり、やがては他の紀元を排して、南アラビア全域で使用される唯一の紀元となった。従来一般に「ヒムヤル紀元」と呼ばれていたのがこれである。現在でもこの名で呼ばれることの方が多く、本稿でもこの慣行に従う。「*'b'ly* 紀元」と「*Nbt* 紀元」は、史料の由来地や製作者の属する部族の名称から見て、夫々元来、ヒムヤルの南東方に居たラドマーン Radmān 族とマドハイ Maḡhay 族(地図参照)の間で通用していた、と考えて間違いないであろう。

III 各紀年形式の特徴

紀元にいくつの種類があるのかとか、紀元名の表示されていない、つまり正体不明の紀年の帰属をどうやって判別するか、といった問題を解決する上で、有効な手懸りになると思われるのが、夫々の紀年形式の示差的な特徴である。何故なら、紀元の種類によって、紀年形式にも独自の特徴が見られるであろうから、もしそのような特徴を紀元毎に定式化することが出来るなら、次には逆に、正体不明の暦年でも、その紀年形式の特徴を手懸りとして、それがどの紀元に拠っているのかを判別できるであろう、と考えられるからである。そこで(表1)に列挙した50数例の紀年形式を比較・検討したところ、次のような結

論が得られた。

まず、暦年を示す基数詞の前や後に置かれて、「年」を表わす *hrf* という語の用法の違いを規準にして、紀年形式を A と B の二つのグループに大別できる。夫々の特徴と、特記すべき問題点を挙げると以下ようになる。

(A) このグループには *'b'ly* 紀元と *Nbt* 紀元の紀年形式が含まれる。両者に共通の特徴は、

- (a) 暦年を示す基数詞の後で、必ず *hrf* の複数形が置かれる。
- (b) 一方、この同じ基数詞の前に *hrf* が置かれるか否かは、「月 *wrh*」への言及如何による。即ち、
  - (i) もし、「月」への言及がない場合には、必ず *hrf* の単数形が置かれる。
  - (ii) これに対し、「月」への言及がある場合には、この *hrf* は省かれる。
- (c) では、*'b'ly* 紀元と *Nbt* 紀元の紀年形式の相違点とは言えば、十位を示す基数詞の語尾の形が異なっている。
  - (i) 十位の基数詞が *-hy* という形で終わっていれば *'b'ly* 紀元。
  - (ii) これが *-y* という形で終わっていれば *Nbt* 紀元。碑文南アラビア語全体で見ると、この形が標準形で、前者はハドラマウト方言の碑銘文にも見られる地方的な特殊形である。

いずれにせよ、月名を *wX* (*X* の月) という記号で表わし、同様に *hrf* の単数形を *h*、複数形を *H*、暦年を示す基数詞を *n*、紀元名を *bn Y* (*Y* の年から数えて)、「二者択一」を */*、「任意」を ( ) で表わすと、A グループの特徴を次のように定式化できる。

A: $wX/h-n-H(-bn \overset{(8)}{Y})$

Nbt 紀元の紀年形式で暦年の記された史料については、いささか問題がある。50数例の紀年のうち、*Nbt* 紀元に拠っていることが明記されているのは、RES 4196 のそれだけであるが、この他に、Ja 2356a, M. Māriya, CIH 621 の紀年が、紀元名は表示されていないものの、*Nbt* 紀元のそれと同じ紀年形式で記されている。このうち、後の2例は、紀年形式こそ *Nbt* 紀元のそれであるが、実際の紀年計算の規準になっているのは、ヒムヤル紀元であったと考えられる。その理由は、

- (a) もし仮に、M. Māriya の紀年が *Nbt* 紀元に基づいていたとすると、この紀元は後述の理由により B. C. 31±15年に相当するので、史料に記された434年は、A. D. 400年前後にあたる。ところが、この時代に *T'm/*

Yhm'm/MR という王の存在した可能性がないのである (表 2 参照)。それに対し、この紀年がヒムヤル紀元に基づいていたとすると、これは A. D. 324/325 年にあたり、その場合にはこの王の存在も認めうる。このように、ヒムヤル紀元に基づいて暦年を数えながら、紀年形式だけは *Nbt* 紀元のそれというのは、この刻文の作者が、その当時ヒムヤルの領域内で活動していたとはいえ、元来マドハイ族の支配していた南東地方の出身者であったからではなかろうか。

- (b) CIH 621 の場合も似たようなケースである。この刻文のテキストは、A. D. 525 年におこったエチオピア軍の南アラビア侵入に言及しており、文脈から推して、この事件からそれほど隔たった時期に記されたものではない。ところが、もし仮にこのテキストの紀年が *Nbt* 紀元に基づいていたとすると、テキストに記された 640 年は A. D. 600 年前後の、ササン朝ペルシャによる占領期にあたり、歴史的には到底受容れ難い。それに対し、この紀年がヒムヤル紀元に基づいていたとすると、これは A. D. 531 年にあたり、その場合にはテキストの内容とも矛盾しない。このように、特殊でしかも時代遅れの紀年形式が用いられていたというのは、おそらくこの刻文の残されていたフスン・アル・グラープ *Ḥuṣn al-Ġurāb* (古代のカナ) が、南東方の辺境地であることに因るのであろう。この地方では、紀年計算の規準が、本来この地方のものであった *Nbt* 紀元からヒムヤル紀元に切換った後まで紀年形式だけは旧来の形式が保持されていたのではなかろうか。

以上二つの史料に記された暦年が、紀年形式は *Nbt* 紀元のそれであるにもかかわらず、実際の紀年計算はヒムヤル紀元を規準に行なわれたと言えるのに対し、Ja 2356a の 345 年という暦年は、果たして *Nbt* 紀元に拠ったのか (その場合には A. D. 314±15 年にあたる)、それともヒムヤル紀元に拠ったのか (その場合には A. D. 235/236 年にあたる)、判定の確たる根拠が見出せない。ただ、パレオグラフィの観点からこの刻文の書体の特徴を見ると、前述の RES 4196 (A. D. 285±15 年) の書体よりも、後の時代に属するように思われる。従って、おそらくこの Ja 2356a の紀年は *Nbt* 紀元に拠っているのであろう。

Nbt 紀元に関して、最後にもう一つ注記を要するのが、MAFRAY-Ḥaṣī 5 である。この史料については、365 年という暦年が記されているということが報じられているものの、未刊行のために、紀年形式の詳細も書体の特徴も不明で

ある。しかしこの刻文は、Ja 2356a と次のような共通点を有している。

- (a) 両者ともにマドハイ族の領域で発見された。
- (b) 両者ともにマドハイ族の同一の族長 *qayl*⁽¹⁰⁾ に言及している。
- (c) テキストに記されている暦年の数値が接近している。

このような点から見て、この MAFRAY-Ḥaṣī 5 の紀年も、おそらく *Nbt* 紀元に拠っているのであろうと考え、(表1) ではアステリスクを二つ付けて、A. D. 334±15年の箇所に挿入した。

以上がAグループに属する *'b'ly*, *Nbt* 両紀元の紀年形式の特徴と、それに関連する諸問題である。

(B) このグループに入るのは、ヒムヤル紀元の紀年形式である。その特徴は、

- (a) 暦年を示す基数詞の後に「年」を表わす語が置かれない。
- (b) 基数詞の前では、
  - (i) もし「月 *wrh*」への言及がない場合には、必ず *hṛf* の単数形が置かれる。
  - (ii) しかし「月」への言及がある場合には、この *hṛf* という語が置かれるか否かは、時代によって異なる。即ち、少なくともA. D. 300年(YMN 13 参照)までは、「月」への言及があっても、*hṛf* は基数詞の前に必ず置かれたが、その後この語の使用は任意となったようで、A. D. 360年の史料(ʿAbadān)に、*hṛf* の省かれた最初の例が現われる。そしてA. D. 465年の史料(Ry 520)の例を最後として、その後は紀年形式の中で *wrh* とともに *hṛf* が使用されるということとはなくなる。⁽¹¹⁾

以上よりBグループの特徴を次のように定式化できる。

B₁ (465年まで) : (wX-)h-n(-bn Y)⁽¹²⁾

B₂ (360年以降) : wX/h-n(-bn Y)⁽¹³⁾

ヒムヤル紀元の紀年形式に関して、さらに Nāḡī 1 と Gr 40 に記された暦年を検討しなければならない。先にも述べたように、*Bkrm* 紀元という第4の紀元が存在したと考えるロバン氏は、この2史料の紀年がこの紀元に拠っていると主張している。⁽¹⁴⁾ しかし卑見によれば、そのような紀元は存在せず、この2史料の紀年が拠っているのはヒムヤル紀元で、夫々A. D. 36/37年と57/58年にあたっている。その理由は、

- (a) Gr 40 は *Hakīr* で、また Nāḡī 1 はその近くの *Hammat aḏ-Ḍubāʿ* で、即ち共にヒムヤルの領域内で発見された。

(b) 両テキストの紀年形式は、まさに上に定式化したヒムヤル紀元のそれである。

(c) もし仮にロバン氏の主張するように、Naḡi 1 の *hṛf/Bkṛn/bn^o/mrt* が紀元を表わすのであれば、他の紀元がそうであるように、これも前置詞 *bn* によって導かれて、「*Bkṛn/bn^o/mrt* の年から (数えて何年)」という形をとる筈である。ところが実際には、*hṛf/Bkṛn* を導いている前置詞は *b-* なのであるから、この箇所は「*Bkṛn/bn^o/mrt* の年に」という意味になる。ここから見て、*Bkṛn/bn^o/mrt* は実はヒムヤル紀元の紀年に添えられた名祖の名であって、ヒムヤル紀元の146年は偶々「*Bkṛn/bn^o/mrt* の年」にも当たっていた、ということを示しているにすぎないと思われる。

(d) Naḡi 1 はテキストの一部しか刊行されていないので、書体の特徴を知ることが出来ないが、Gr 40 の方は、刊行された写真を通じてその点を確認できる。それによると、パレオグラフィの観点から判断して、その書体は1世紀前半の特徴をそなえているように見える。

(e) 3世紀の半ば以前に、ヒムヤル紀元に基づいて暦年の記された史料の数が非常に少ないという事実は、この時代にはまだヒムヤル紀元が通用しておらず、従って上の2史料の紀年は別の紀元に基づいていた、ということの意味する訳ではない。この時代には、そもそもヒムヤルの領域内に残された碑文の数そのものが少ないのだから、それに応じてヒムヤル紀元に拠って紀年の記された史料が少ないのは、当然のことではなからうか。

以上の観察と考察の結論として、紀年形式に関して次のことが言える。

(a) 紀年形式の違いは原則として、その紀年が基にしている紀元の違いを反映している。従って、紀年形式の示差的な特徴をもとに、その紀年が拠っている紀元の種類を判別できる筈である。

(b) しかし、長期間にわたって使用されたヒムヤル紀元で観察されたように、同一の紀元の紀年形式でも、時代とともに次第に変化する。

(c) また、*Nbṭ* 紀元で観察されたように、地域的な特殊性という要素も考慮に入れる必要がある。即ち、碑銘文の記されたのが辺境的な土地であったり、その作者がそういう地方の出身者であった場合には、実際に紀年の規準となった紀元と、紀年形式との間に違いがおこるケースもある。

しかしいずれにせよ、これらの観察結果は、史料の中の正体不明の紀年が拠っている紀元の種類を判別する上で、相当に有効な手懸りとなりうる。

IV 各紀元と西暦との対応関係

この章では、これまでの説明の中で結論を先取りした形で使ってきた、三つの紀元が夫々西暦何年に当たるかという問題を検討する。但し、最も重要なヒムヤル紀元と西暦年代との関係については、近年相次いで発表した3篇の拙稿⁽¹⁶⁾の中で詳細に論じ、既に結論を得ているので、ここではその要点を記すにとどめたい。

ヒムヤル紀元が西暦何年に当たるかという問題の解明に、決定的な重要性を有しているのが、6世紀の前半に、現在はサウジアラビア領になっているナジュラーンという都市で行なわれた、キリスト教徒迫害の年代である。というのも、この迫害の数ヶ月前の出来事を記録しているという点については、研究者の間で異論のない3点の南アラビア刻文 (Ry 507, 508; Ja 1028) に、いずれもヒムヤル暦で633年という紀元が記されていることから、この迫害の西暦年代さえ確定できるなら、それをもとにして、ヒムヤル紀元と西暦との関係も明らかにすることが出来る、と考えられるからである。そこで筆者は、この迫害に関する4点の史料の記事を詳しく検討・比較し、ナジュラーンの迫害の行なわれたのは西暦523年11月24日前後、という結論に達した。ということは、3点の刻文に記されたヒムヤル暦633年は、西暦523年に当たるということであり、そこから単純計算では、ヒムヤル紀元は西暦紀元前110年であったということが言えた。「単純計算では」と但書が必要なのは、ヒムヤル暦の1年の長さが西暦のそれと同じであったかどうかが未解決の問題で、もし同じでないとすると上の計算は成立しないし、他方、ヒムヤル暦の新年の開始期が西暦のそれと異なる場合には、二つの暦の対応関係にも当然ズレが生じるからである。

次に、ラドマーン族の間で通用した *'b'ly* 紀元と西暦との関係は、MAFRAY-al-Mi'sāl 2 の紀年によって明らかに出来る。この史料によれば、*'b'ly* 紀元の179年がヒムヤル紀元の363年に当たるということなので、ヒムヤル紀元がB. C. 110年なら、*'b'ly* 紀元はA. D. 74/75年ということになる。

最後に、マドハイ族の間で通用した *Nbt* 紀元と西暦との関係について。この紀元名を明記した唯一の史料 RES 4196 には、ヒムヤル王 *Ysrn/Yhn'm* とその息子の *šmr/Yhr's* の名が記されていて、これがこの2人の王の共同統治時代に属することを示している。従って、この史料に記された *Nbt* 紀元の316年は、この共同統治時代の或る年ということになる。そこでこの時代の上限と下限を次のようにして求める。まず、A. D. 270/271年の MAFRAY-al-Mi'sāl 5 には、

Ysr̥m/Yhn̥'m の名はあるが、息子の *Šmr/Yhr̥š* のそれは未だ見えない。一方、A. D. 300年の YMN 13 には、この *Šmr/Yhr̥š* の名はあるが、父の *Ysr̥m/Yhn̥'m* のそれは既⁽¹⁷⁾にない。つまり、*Nbt* 紀元の316年はA. D. 270/271年と 300 年の間の或る年ということなので、*Nbt* 紀元そのものは、B. C. 46年と16年の間の或る年ということになり、(表1) にはB. C. 31±15年という形で示してある。

しかしいずれにしても、夫々の紀元に基づく紀年の例が実際にテキストの中に現われるのは、紀元そのものの年代よりもかなり時が経過してからのことである。ヒムヤル紀元の場合には *Nāgi* 1 の146年 (= A. D. 36/37年)、*'b'ly* 紀元では MAFRAY-Sārī' 6 の72年 (= A. D. 146/147年) が初出例であるし、*Nbt* 紀元に至っては RES 4196 の316年 (= A. D. 285±15年) が最初である。今後、調査が進むにつれて史料の数はさらにふえ、その中には紀元のもっと古い使用例を伝えるものがあるかもしれないが、それにしても、各紀元がおそらくは週及的に実際に定められた年代を知ることは、余程の幸運に恵まれぬ限り不可能であろう。

V 各紀元の由来

この章では、三つの紀元夫々の由来について考察する。10世紀のイエメンの学者アル・ハムダーニー al-Hamdānī の著わした『アル・イクリール *al-Iklīl* (王冠の書)』の第2巻が⁽¹⁸⁾、この問題に関して、直接とは言えぬにせよ手懸りを与えてくれる。この書の中で語られているヒムヤル王の系譜を整理してみると(表3)、そこから実に興味深い事実がいくつか浮かび上がってくる。

先ず、ヒムヤル朝の名祖ヒムヤルを第1代とすると、第20代目にシャムマル・ユルイーシュ・アル・アクバル *Šammar Yur'īš al-Akbar* という王の名が見える。このシャムマルを、3世紀末から4世紀初めにかけて実在したヒムヤル王 *Šmr/Yhr̥š* に同定できるという点については、研究者の間に異論はない。当時の南アラビアでは1世代が約20年であったので、初代のヒムヤルと20代目のシャムマルとの世代差は19代、年数にして約380年である。ということは、シャムマルの在位年代から逆算すると、名祖ヒムヤルの年代はB. C. 100年前後ということになり、これはヒムヤル紀元がB. C. 110年であるという事実と見事に符合する。アル・ハムダーニーの諸著作を見る限り、彼がヒムヤル紀元を知っていたという徴候は全くない事実を思うと、この符合は驚くべきことである。10世紀のアル・ハムダーニーが、『アル・イクリール』を著わすに際して

依拠したヒムヤル朝の起源に関する伝承と、1世紀以前の或る時期に行なわれたヒムヤル紀元の制定は、ともに、例えばヒムヤル部族連合の結成というような、重要な歴史的事件にその淵源を有しているのではなかろうか。それ以前の時代には全くその存在を知られていないヒムヤルが、B. C. 1世紀になって急速に台頭してきたことは、他の方面の史料からも窺えるのである。⁽¹⁹⁾

次に、'bly 紀元の A. D. 74/75 年という年は、この紀元が通用していたラドマーン族の歴史の転換期に、これまた見事に符合している。まず、碑銘文史料によると、この部族は元来カタバーン王の支配下に置かれていたが、1世紀の後半に、その当時連合王国を形成していたサバとヒムヤルが著しく勢力を伸ばした際に、その連合王国の王であった *Krb'l/Wtr/Yhn'm* とその息子達に臣属するようになった。一方『アル・イクリール』の第2巻を見ると、そこではこの部族の名祖ラドマーンが、ヒムヤル朝の第9代の王ワーイル *Wā'il* の息子で、第10代目の王アブド・シャムス 'Abd Šams の兄弟と記されている。このラドマーンとシャムマル・ユルイーシュの世代差は10代、年数にして約200年なので、後者の在位年代から逆算すると、ラドマーンの年代は1世紀の最後の四半期ということになり、'bly 紀元の西暦年代にほぼ一致する。また、ラドマーンの父の名ワーイル *Wā'il* は、*Krb'l* のエピテット *Wtr* の崩れた形とも解せるので、そうすると、『アル・イクリール』の中でラドマーンがワーイルの息子とされているのは、1世紀の後半にラドマーン族がカタバーン王国から離脱して、サバ・ヒムヤル連合王国の *Krb'l/Wtr/Yhn'm* 王に臣従するようになったという、上記の歴史的事実の文学的表現と解せる。

以上の点から、'bly 紀元は、1世紀の後半にラドマーン族が、数世紀に及んだカタバーン王国の支配を脱して、サバ・ヒムヤル連合国の勢力下に入ったという、この部族にとっては重要な歴史的イベントを記念して定められたのではないかと考えられる訳である。

最後に、マドハイ族の間で通用していた *Nbt* 紀元の由来について。他の二つの紀元の由来から推して、この紀元も、B. C. 31年前後にマドハイ族におこった歴史的な重要イベントを記念しているのではないかと考えられる。しかし、B. C. 1世紀後半は碑銘文史料に恵まれない時代で、この当時この部族に具体的に何がおこったかを知ることは非常に難しい。他方『アル・イクリール』の第2巻を調べると、シャムマル・ユルイーシュより16代前、即ち約320年前の B. C. 1世紀後半にあたる所に、シャムマル *Šammar* とカリブ・イル・アイファ

ー Karib Il Ayfa' の名を見出して驚かされる。というのも、『アル・イクリール』のこの前後の箇所に現われる王名が、すべて半ば伝説的な響きを持っている中で、この二つの王名だけが歴史的な現実味を帯びていることに、先ず異様な印象を受けるし、また、この二つの王名が実際に碑銘文の中で同時期に現われるのは、これより約300年後の3世紀中頃のヒムヤル王 Šmr/Yhhmd と Krb'l/yf' の名としてであるからである。

マドハイ族はラドマーン族と同じく、元来はカタバーン王国に従属していたが、この王国の弱体化に伴ってやがてその支配を脱し、その後紆余曲折はあったものの、3世紀の初め頃からは、ラドマーン族とともにヒムヤル軍の中核となって、サバやハドラマウトを相手に戦っている。殊に上記2王の下でのこの両部族の活躍は顕著である。またこの2王自身が、ことによるとこの両部族のいずれかの出身ではないかと思われる節さえある。そのように、マドハイ族が最も活躍した時期のヒムヤル王の名が、『アル・イクリール』の中で、当の3世紀中頃ではなく、それより約300年前のB.C. 1世紀後半にあたる時代に現われるのは、一体どういう訳であろうか。先にも記したように、この時期のマドハイ族の事情を伝える史料がないため、確かなことは言えないが、当時は、マイーン王国が滅亡に追込まれたり、カタバーン王国の王統も一時途絶えたかに見える一方で、ヒムヤル部族連合が勢力を拡大したり、アウサーン王国が一時的に復興するというような大動乱期であったので、おそらくマドハイ族の境遇にも大きな変化がおこったことであろう。ここから先は筆者の完全な推測であるが、ことによるとその時の激動と、それから約300年後の3世紀中頃にマドハイ族を見舞った政治的・軍事的変動との間に、かなり類似点があったのかもしれない。もしこの推測が当たっているならば、それからさらに何百年も後の、アル・ハムダーニーが生きた10世紀の頃までに、この二つの大変動が混同されるに至っていたということは十分考えられる。3世紀中頃に実在した Šmr/Yhhmd と Krb'l/yf' が、B.C. 1世紀後半に存在したかのような誤解は、この混同の結果生まれたのではなからうか。

以上のように考えると、Nbt 紀元は、B.C. 1世紀後半にマドハイ族におこった、3世紀中頃のそれと類似の重要事件を記念して定められたのではないかと結論が得られるが、これは文字通り仮定に仮定を重ねた上での仮の結論であって、真相はB.C. 1世紀後半の状況を伝える碑銘文が発見されるまでは明らかになるまい。

VI ヒムヤル暦の新年

紀元に関する最後の問題として、ヒムヤル暦の新年が我々の暦のいつから始まるのかという点について、ごく簡単に述べておきたい。まず、ヒムヤル暦の暦月とユリウス暦のそれと対応関係については、先に名を挙げたビーストン、⁽²⁰⁾ロバンの両氏の研究によって解明された。また新年がどの月から始まるかについて、両氏は5世紀中頃の CIH 540 と6世紀中頃の CIH 541 の2碑文の内容を分析し、その結果先ずビーストン氏が、新年は5月から始まると推測した⁽²¹⁾が、後にロバン氏によって4月と訂正され、現代はこれが半ば定説化している⁽²²⁾。もっともロバン氏は、新年は春分から始まるという可能性も示唆しているが、⁽²³⁾史料的に未だ確証がない。

しかし厳密に言うならば、CIH 540, 541 という史料のある5～6世紀においては、確かに4月に新年が始まると言えようが、それ以前の、例えば筆者がヒムヤル紀元を置いたB. C. 110年にも果たして新年は4月から始まったのか、さらにはヒムヤル紀元は本当にB. C. 110年に当たるのかについては、断定出来ない。それというのも、ヒムヤル暦の1年が正確には何日であったのかを示す史料が未発見なのである。ロバン氏をはじめとする殆どの研究者達は、ヒムヤル暦の1年もユリウス暦の1年と大差なかったであろうという前提に立って論を進めており、筆者もこれに代わる新説を提出するだけの用意がないので、目下のところは暫定的にこの通説に従わざるをえない。この点に関して最初に異議を唱えたのはリックマンス J. Ryckmans 氏であったが、氏はこれに代わる氏自身の説は提示していない。⁽²⁴⁾また近年ニースケンス P. J. M. Nieskens 氏が天文学の知識を応用して、ヒムヤル暦元年は4月ではなく9月の秋分に始まったという新説を唱えたが、⁽²⁵⁾同氏は自然科学畑の出身の故であろうか、史料の扱い方が基本的に間違っている上に、計算の際の数字の処理に意図的とも思える歪曲があって、その説は受容れ難い。

以上のような次第で、(表1)の中でも、ヒムヤル暦元年はB. C. 110年4月から翌109年の3月まで、以後も新年は西暦の4月から始まるということにして、ヒムヤル紀元に基づく年を西暦年代に換算してある。尚、'b'ly 紀元と Nbt 紀元の新年の開始時期は、史料がないので全く不明である。

VII おわりに

本稿では、古代南アラビアで通用していた紀元に関する諸問題を検討した。

これまでの論旨をまとめると次のようになる。

(a) 前イスラム期の南アラビアで通用していた紀元は、今まで知られているところでは *Mbhq* (通称ヒムヤル紀元), *'b'ly*, *Nbt* の3種である。

(b) 紀年形式の特徴を分析した結果、三つの紀元が夫々独自の紀年形式を有していること、及び紀年形式の特徴には、時代差や地域差も反映していることが明らかになった。

(c) 三つの紀元のうち、ヒムヤル紀元がB. C. 110年にあたることは、既発表の拙稿の中で詳説したので、本稿ではこの結論を確認した上で、これをもとに他の2紀元と西暦年代の対応関係をもとめ、*'b'ly*紀元はA. D. 74/75年、*Nbt*紀元はB. C. 31±15年にあたるという結論を得た。

(d) 三つの紀元の由来について考察し、おそらく、ヒムヤル紀元はヒムヤル部族連合の結成を、*'b'ly*紀元はラドマーン族がカタバーン王国を離脱してサバ・ヒムヤル連合王国の支配下に入ったことを、*Nbt*紀元についてはよく判らぬが、やはりおそらく、ヒムヤルとの関係の中でマドハイ族におこった歴史的重要な事件を、夫々記念して定められたのであろうと推論した。

今後、現地調査の進展によって史料の数はさらにふえるであろうから、それに応じてこれらの結論には適宜補訂を行なっていく心算である。また、紀元法と並んで重要な紀年法であった名祖法についても、いずれ詳しく検討しなければならないと考えている。

注

- (1) この方面の研究の史料となるのは、専ら、なんらかの方式に従って暦年の記された碑銘文である。この種の史料は、既に前世紀の末より知られていたもので、当然その頃から暦法・紀年法に関する研究も行なわれていた。それをまとめて整理したのが、今から30年余り前に出た、A. F. L. Beeston, *Epigraphic South Arabian Calendars and Dating*, London, 1956. という、50頁足らずの小冊子である。爾来今日まで、史料となる碑銘文の数は増加し、それに伴って、暦法・紀年法に関する個別的な問題を扱った研究はかなり発表されているが、これを改めて総合する作業を行なった者はいない。それはおそらく、上記の書には補訂を要する箇所が少なくないとはいえるものの、著者の見解を根底から覆すような事実は発見されていない、という事情によるのであろう。
- (2) 拙稿「ナジュラーンの迫害の年代について」、『史学雑誌』第95編第4号、1986年、25頁、注⑨参照。
- (3) MAFRAY-al-Mi'sāl 2 (表1参照)。
- (4) Cf. *ibid.*
- (5) Cf. *ibid.*; GI 799, 1594; Hakir 1; Av. Būsān 4; YM 1695; (*Abadān).

- (6) Cf. RES 4196.
- (7) Chr. Robin et M. Bāfaqih, “Deux nouvelles inscriptions de Radmān datant du II^e siècle de l’ère chrétienne”, *Raydān*, Vol. IV, 1981, pp. 84–87.
- (8) 「(Yの年から数えて) n 年の年 (または, n 年のXの月)」
- (9) Robin-Bāfaqih, *op. cit.*, p. 85; p. 90, n. 20.
- (10) Cf. *ibid.*, p. 85.
- (11) (表1)の第6欄に挙げた紀年形式の中で、頭文字を大文字で記した *Hyf* は、月名を表わす固有名詞であって、今問題にしている「年」を表わす普通名詞ではない。
- (12) 「(Yの年から数えて) n の年 (のXの月)」
- (13) 「(Yの年から数えて) n の年 (または, n のXの月)」
- (14) Robin-Bāfaqih, *op. cit.*, p. 85.
- (15) G. Garbini, “Iscrizioni sabee da Hakir”, *Annali dell’Istituto Orientale di Napoli*, Vol. XXXI, 1971, Tav. III (Hakir 2); *Južnaja Aravija, Pamjatniki drevnej istorii i kul’tury*, Vol. I, Moskva, 1978, Fig. 53.
- (16) 「ナジュラーンの迫害の年代について——古典シリア語三史料の伝える年代——」, 『東洋学報』第67巻第1・2号, 1985年, 81–109頁; 「ナジュラーンの迫害の年代について——『アレタス殉教録』の伝える年代——」, 『史学雑誌』第95編第4号, 1986年, 1–33頁; 「再びナジュラーンの迫害について——関係史料の再検討——」, 『東洋学報』第68巻第3・4号, 1987年, 99–127頁。
- (17) Av. Būsān 4 は、テキストに欠損があって、A. D. 297年のものか317年のものかよく判らぬので、ここでは YMN 13 の方を史料として採用した。尚 *šmr/Yhr’s* の王号が MR から MY に発展しているのは、3世紀末にこの王がハドラマウト王国を征服・併合した結果である。
- (18) Abū Muḥammad al-Ḥasan b. Aḥmad b. Ya’qūb al-Hamdāni, *Kitāb al-Iklīl*, Vol. II (ed. al-Ḥiwālī M. b. ‘Alī al-Akwa’), al-Qāhira, 1386h./1966m.
- (19) ヒムヤルに言及した最古の碑銘文は、書体の特徴から見ておそらく B. C. 1 世紀後半から次の世紀の前半へかけてのものであろうと思われる RES 2687 である。この史料によれば、当時この新興勢力はハドラマウト王国の西部国境を脅していた。他方、古典史料としてこの勢力に最初に言及したのはプリニウスの『博物誌』で、その第6巻32章158節に、メサラという町を持つホメリタエ族（即ちヒムヤル）への言及がある。一般にこの箇所は B. C. 1 世紀の史料に基づいていると解されているが、その史料が何であるかは特定されていない。情報源が確かなのは、そのすぐ後の161節で、B. C. 25/24年に南アラビアに遠征したアエリウス・ガルスの一団がもたらした情報に基づいて、当時ホメリタエ族が南アラビアで最も数の多い種族であったと記してある。
- (20) A. F. L. Beeston, “New Light on the Himyarite Calendar”, *Arabian Studies*, Vol. I, 1974, pp. 1–6; Chr. Robin, “Le calendrier himyarite: nouvelles suggestions”, *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies*, Vol. XI, 1981, pp. 43–53.
- (21) Beeston, “New Light”, p. 4.
- (22) Robin, “Le calendrier”, p. 48.

- (23) *ibid.*
- (24) J. Ryckmans, “Un cas d’impiété dans les inscriptions sud-arabes”, J. Quaegebeur (éd.), *Studia Paulo Naster Oblata II: Orientalia Antiqua*, Leuven, 1982, p. 209, n. 14.
- (25) P. J. M. Nieskens, “Vers le zéro tage définitif des ères préislamiques en Arabie du Sud antique”, à paraître dans *Proceedings of the Mahmud Ghul Memorial Symposium* (Yarmouk University, Irbid, December 8–11, 1984).

表1：紀元に基づいて年の記されている碑銘文

* ナシ：ヒムヤル紀元 (B. C. 110年) に基づく紀年

* : 'b'ly 紀元 (A. D. 74/75年) に基づく紀年

** : Nbt̄ 紀元 (B. C. 31±15年) に基づく紀年

*** : Nbt̄ 紀元の紀年形式をとりながら、ヒムヤル紀元に基づいている紀年

王 号

MS: mlk/Sb'

MR: MS/wḡRydn

MY: MR/wḤḏrm(w)t/wYmnt

MA: MY/w'rbhmw/Twdm/wThmt

MH: mlk/Ḥḏrm(w)t

西 暦	紀 年	碑 銘 番 号	由 来 地	王 名 (又は作者名)	紀 年 形 式
36/37	146	Naḡi 1	Ḥammāt aḏ-Dūba'		bḥrfn/ḏlšt(w'rb'y/wm'tm/bḥrf/Bkrm)/bn/ 'mrt
57/58	167	Gr 40 (=Ga 17=Hakir 2)			bḥrfn/ḏlsb't/wsty/wm't
146/147	72	*MAFRAY-Sārī' 6		Whb'ī/Ybz (qyl/Rdmn/wḤwln)	bḥrfn/ḏltm/wsb'hy/hryftm
155/156 159/160	81 85	*MAFRAY-al-Ḥiḡla (Darb al-Ḥuba)		Tb'm/Yh'n	未 公 刊
218/219	144	*RES 3958	Qarneim	'I'z/Ylt/MḤ/bn/'mdḥr Nšrm/Yḥmd (q. R. Ḥ.)	wrḥs/Šyd/ḏl'rb't/w'rb'hy/wm't/hryftm
218/219	144	*YMN 10	Qāniya	'I'z/Ylt/MḤ/bn/'mdḥr Nšrm/Yḥmd (q. R. Ḥ.)	bḥrfn/ḏl'rb't/w'rb'hy/wm't/hryft
220/221	146	*YMN 9 (=MAFRAY-al-Mī'sāl 16)		'I'z/Ylt/MḤ/bn/'mdḥr Nšrm/Yḥmd (q. R. Ḥ.)	bḥrfn/ḏlšt(w'rb'hy/wm't/hryftm
222/223	148	*MAFRAY-al-Mī'sāl 4		'I'z/Ylt/MḤ/bn/'mdḥr Nšrm/Yḥmd (q. R. Ḥ.)	bwrḥn/Šyd/ḏltmnwt/w'rb'hy/wm't/hryftm
246/247	172	*RES 4197bis	SE	(mr'hmw/Šbḥm/'rsl)	bḥrfn/ḏm/wsb'hy/wm't/hryftm

253	179 363	*MAFRAY-al-Mi'sál 2	Krb'l/yf'/MR, 'šrh/Yhqb/ MS, Lhy't/wkn (q. R. H.)	bwrhñ/Mđr'n/dlts't/wsb'hy/wm't/hryftm/ bn/hrf/b'y/bn'..wñrf/Hmym/dlüt/t/wšhy/ wlt/m'tm/bn/hrf/Mbhđ/bn/'bđ]
270/271	196 (Robin.) 198)	*MAFRAY-al-Mi'sál 5	Šmr/Yhmd/MR, Krb'l/yf'/ MR, Ysm/Yhn'm/MR, Hžym/ 'wkn (q. R. H.)	bñrfn/dl's't/t/wts'hy/wm't/hryftm
275	385	Gl 799 (= CIH 46)	Ysrn/Yhn'm/MR + Šmr/Yhr's/ MR	bwrhñ/dMhltm/dbhřfn/dlhmst/wtmny/ wlt/m'tm/bn/hryf/Mbhđ/bn/'bđ
279/280	[3]89	Gl 1594 (= RES 3866)	Ysrn (+ ?)/MR	bñrfn/dlts't/wtmn[y/wlt/m'tm/bn/hř(f)] Mbđ/bn/'bđ
285±15	316	**RES 4196	Ysrn/Yhn'm/MR + Šmr/Yhr's/ MR, Fr'n/Yzl/bn/Drmh/wHšbh/ wY'gf (qyl/š'bnhn/Qšmm/ wMđhym)	bwrhñ/Mđr'n/dlsts'sr/wlt/m'tm/hryftm/bn/ hřf/Nbđ/wđhřf
286	396	Hakir 1 (+ CIH 448) (= Ga 16)	Ysrn/Yhn'm/MR + Šmr/Yhr's/ MR	bwrhñ/dQyšn/dbhřfn/dlsts/wts'y/wlt/ m'tm/bn/hřf/Mbhđ/bn/'bđ
297 ou 317	407 427	Av. Búsán 4	Šmr/Yhr's/MY	[...d]Mđr'n/dbhřfn/dl's't/w[.../bn/hř(y) f/Mb]đ/bn/'bđ
300	409	YMN 13	Šmr/Yhr's/MY	wřhw/dM'f'n/dbhřfn[d]lts't/w'r's'/m'tm
310/311- 319/320?	42[. .]	YM 1695	Šmr/Yhr's/MY	[...šřy/w'r's'/m'tm/bn/h(ř)f/Mbhđ/bn/ 'bhwđ
314±15	345	**Ja 2356a (= VL 29a)	S'dm/Yhskr/wbnwhw/.../bny/ Hšbh/wY'gf	wřhw/d'đdn/dlhmst/w'r's'y/wlt/m'tm/ hřftm
324/325	434	***M. Măriya	T'm/Yhn'm/MR/bn/Dmr'y/ Yhbr/MR	bqbl/hřfn/dl'r's't/wlt/y/w'r's'/m'tm/hřwftm

334±15	365	**MAFRAY-Ḥaṣī 5		未 公 刊	
360	470	ʿAbadān		mlkn/Ṭʾm/Ynʾm, mlkn/Ṭʾm/ 'yfʿ, mlkn/Dmrʾdy/ʾyfʿ, Mlšn/ 'rym/w&c./lht/Yzʾn/wXlgb/ w...	wrḥhw/ḍMḍrʾ[n]/ḍl/sbʾy/wʾrbʾmʾtm/ bn/lhr/Ybhd/bnʾbhd/wkn/bthrt/Hḍrmt/ wrḥ/Šmsḥy/ʾslmm/Yʾg..n
384	493	G1 389 (= RES 3383)	Minkat		wrḥhw/ḍDʾw[n]/(ḍb)hryfn/ḍlʾtlt[ʿ]/ wtsʾy/wʾrbʾmʾtm
384	493	B. Aṣwal 2 (= Ga 3)			wrḥhw/ḍDʾwn/dbhryfn/ḍlʾtlt/wisʾy/wʾrbʾ/ mʾtm
402/403	512	MAFY-B. Zubayr 2	Marmāl?		bḥrʾfn/ḍlʾt/wʾšrt/wḥms/mʾtm
433	543	Ry 534+MAFY-Rayda 1		'bkrb/'sḍ/MA+Hšn/Yhʾmn/ MA+Mʾdkrb/Yhnʾm/MA+ Mrīdʾln/Yzʾn/MA+Šrḥbʾl/Yʾfr/ MA	wrḥhw/ḍHrfn/ḍlʾtlt/wʾrbʾy/wḥms/mʾtm
439/440	549	Philby 124g	Naḡrān	Mʾdk[rb]	wrḥhw/ḍltsʾt/wʾrbʾy/wḥms/mʾtm
448	558	(Bee inédit)	Baynūn		bwrḥm/ḍʾln/dbhryfn/ḍlʾtmnt/wḥmsy/ [wḥm]s/mʾtm
450	560	RES 5085 (= Ry 340)	W. Raḥayle	'lht/Yzʾn, etc.	wrḥhw/zŠrbn/ḍlsty/wḥms/mʾtm
455 455 456	564 565 565	CIH 540/51-54 ...../60-61 ...../97-100	Mārib	Šrḥbʾl/Yʾfr/MA	wrḥhw/ḍDʾwn/dbhryfn/ḍlʾrbʾt/wsty/wḥms/ mʾtm, bwrḥm/ḍṬʾbn/ḍlḥmst(/)lwsly/ wḥms/mʾtm, wrḥhw/ḍDʾw/ḍlḥmst/wsty/ wḥms/mʾtm
456	566	Dostal 1	W. Siir	Šrḥbʾl/Yʾfr/MA	[.....ḍM]bkrm/dbhryfn/ḍlʾst/wsty/wḥm [s/mʾ]t[m]

462	572	Gar ŠY 1, 2 (=Ga 1 A, B)	Zafār	Šrhbʿl/Yʿfr/MA	bwrh̄n/dʿln/dbh̄rfn/dlt̄ny/wsbʿy/wḥms/mʿtm
463	573	CIH 6	Šanʿāʿ		bwrh̄/dH̄rf/dlt̄lt/wsbʿy/wḥms/mʿtm
465	574	Ry 520	Dulaʿ?		wrh̄hw/dDʿwn/dlh̄ryfn/dlʿrbʿt/wsbʿy/wḥms/mʿtm
466	[57]5	CIH 644	?	[Šrh̄]bʿl/Ykf/MA (?)	[bw]r̄h̄n/dH̄ltn/dlh̄mst/w[sbʿy/wḥms/mʿtm]
472	582	RES 4919 + CIH 537	?	Šrh̄bʿl/Ykf/wbnyhw/...]/ Nwfm/wLhyʿt/Ynwf/wMʿdkrb/ Ynʿm/MA	wrh̄hw/dH̄rfn/dlt̄ny/wtmnyy/wḥms/mʿtm
486	596	MAFRAY-Ḥizmat	Abū Tawr 4	[Šrh̄bʿl/Ykf/ml/wŠrh̄ʿl/Yqbl/w &c./ʿlh̄c/Yz n	w[rh̄h]w/dQyzn/dlst/wtsʿy/wḥms/mʿtm
487	597	Robin-Nağr 1 (=RES 5010)			[.....]dʿln/dlsbʿt/[w]tsʿy/wḥms/mʿtm
504	614	Fa 74	Mārib?	Mrdʿln/Yaf/MA	wrh̄hw/dM[d]rʿn/dlʿr[b]ʿt/[s]rʿl/wst/[m] (ʿ)ʿt(m)
507/509	[6]17/9	Gar NIS 4 (=Ga 30)	Zafār		wrh̄hw/dMdrʿn/[dl..]ʿtʿsrʿw[st/mʿtm]
510	619	Gar AY 9d (=Ga 12d=Gar B. Ašwal)		Mrdʿln/Ynwf (sans titre)	wrh̄hw/dMʿn/dltsʿtʿsrʿwst/mʿtm
515	625	BR-Yanbuq 47		Smyfʿ/šwʿ/w&c./ʿlht/Yzʿn/ wGdum/w...	wrh̄hw/dT̄b̄tn/dlh̄mst/wšry/wst/mʿtm
519	629	Robin- Viallard 1	Zafār?		(w)rh̄hw/dMbkrm/dltsʿtʿwšry/wst/mʿtm
521	631	Ry 510	Māsil	Mʿdkrb/Yʿfr/MA	bwrh̄n/dQyz[n/dlʿhd/wlty/wst/mʿtm

523	633	Ry 508	Kawkab	mlkn/Ysf/'s'r, Šrḥ'1/Yqbl/bn/ Šrḥb'1/Ykml/bnw/Yz'n/w...	wṛḥhw/dQyzn/dlttlt/wltly/wst/m'tm
523	633	Ry 507	Himā	mlkn/Ysf/'s'r, Šrḥ'1/dYz'n	wṛḥhw/dMḡr'n/dlttlt/wltly/wst/m'tm
523	633	Ja 1028	Himā	mlkn/Ywsf/'s'r/Y'r/mlk/kl/ 'g'bn, Šrḥ'1/Yqbl/dYz'n	wṛḥhw/dMḡr'n/dlttlt/wltly/wst/m'tm
531	640	***CIH 621	Ḥuṣn al-Ġurāb	Smyf'/'šw'/w&c./lnt/Kl'n/ wḡYz'n/wGdm/w...	wṛḥhw/dHltn/dl'trb'cy/wst/m'tm/hrftm
547	657	CIH 541/26-27	Mārib	Abraha	bwrḥ/dQy[z]n/dlsb't/wḥmsy/wst/m'tm
547	(65)7	...../45-46			bwrḥ/dMḡr'n/dlsb't
547	(65)7	...../62-63			bwrḥn/dSrbn/dlsb't
549	658	...../134-136			bwrḥ/dM' n/dltmny't/wḥmsy/wst/m'tm
552/553	662	Ry 506	Muraygān	Abraha	wṛḥhw/dltiny/wsty/wst/m'tm
558	668	Ja 545	Ġ. Balaq (Mārib)	(Ja 546: Abraha)	bwrḥ/dMhltn/dltmnt/wsty/wst/m'tm
559/560	669	CIH 325	Zafār		bḥrfn/dlsb't/wsty/wst/m'tm
		GI 1440	Beyt Niğād		wṛḥhw/dMḡr'n/db[...]
		Gr 11	Yakār		[wṛḥh]w/'ln/dbḥrfn/dlḥmst/w[...]
		Gar Framm 8 (=Ga 36)	Zafār		[...../dH]ltn/dltmnn[...]
		Gar Framm 10 (=Ga 38)	Zafār		[bw]ṛḥn/dTbnt/dbḥr[fin...]
		CIH 542	?		[wṛḥ]hw/[d]Mḡr'n/dbḥryfn[...]

表 2 : 1—6 世紀のサバとヒムヤルの王朝系図

表 3：アル・ハムダーニーの伝えるヒムヤル王の系譜

世代	アル・ハムダーニー	碑銘文の伝える史実	西 暦
1	Ḥimyar	*ヒムヤル紀元	*前110年
4	Šammar Karib Il Ayfaʿ	*Nbṭ 紀元	*前31±15年
9	Wā'il	Krb'l/Wtr/Yhn'm/MR	1 世紀第 3 四半期
10	ʿAbd Šams Radmân	* 'b'ly 紀元	*74/75年
12	Ilšarah Yaḥḏub	'lšrh/Yḥḏb/MR	} 2 世紀前半
13	Watâr	Wtrm/Yh'mn/MR	
17	al-Ḥârîṭ ar-Râ'iš	Gdrt/mlk/Ḥbšt/w'ksmn	2 世紀末～ 3 世紀初
18	Abraha ḏu-l-Manâr	Bygt/wld/Ngšyn	3 世紀前半
19	{ ʿAbd ḏu-l-Aḏ'âr Ifriqîs	{ Grmt/wld/Ngšyn ʿḏbh/mlk/'ksmn	} 3 世紀中頃
20	Šammar Yur'iš al-Akbar	Šmr/Yhr'š/MR→MY	
24	As'ad Tubba' al-Kâmil	'bkrb/'s'd/MY→MA	4 世紀末～ 5 世紀初
31	Zur'a ḏu-Nuwâs (Yûsuf)	Y(w)sf/'s'r/Yt'r	6 世紀第 1 四半期

地図：前イスラム期の南アラビアと碑銘文由来地

1. Mâsil	12. Marmâl	23. Ḥammad aḍ-Ḍubâ'
2. Murayġân	13. Ḍula'	24. Minkaṭ
3. Kawkab	14. Ṣan'â'	25. Ṣafâr
4. Ḥimâ	15. W. Sirr	26. B. Aṣwal
5. Naġrân	16. Mârib	27. Sâri'
6. 'Abadân	17. Ġ. Balaq	28. al-Mi'sâl
7. W. Raḥayle	18. Yakâr	29. Qâniya
8. Yanbuq	19. Bûsân	30. Qarneim
9. Ḥuṣn al-Ġurâb	20. Baynûn	31. W. Širġân
10. Rayda	21. M. Mâriya	32. Ḥaṣi
11. Naġr	22. Hakîr	